

編訳者解説

1 本書の収録方針について——自選リストを基礎として——

本書は朝河貫一が一九〇五年から一九三九年にかけて執筆した主な学術論文のうち日欧比較封建制に関わる論文を収めたものである。朝河は一九三九年に二七論文を自選し資料1を作成している（リスト作成の契機は不明だが、同年十月八日にはヒトラーの自殺を予言し、同二十二日には日本の東亜新秩序論の狂騒を批判した手紙を親友の村田勤に送っており、また一九二六年以後の日記を整理した経緯と併せて推測すると、日米開戦を予想して身辺を整理したのかもしれない。なお、本書所収の「島津忠久の生い立ち」はこの年に発表された）。リストには次の英文説明がある。Book reviews, and abstracts, as well as popular articles, are all omitted. Nor are mentioned results of work as consulting editor or as director of research. (書評・抄録類は通俗的な論文と同様に含めない。また編集に協力した結果として、あるいは研究の責任者としてアサカワの名が付しているものも含めない)。この説明書きから、朝河が自らの学術研究の成果として何を後世に残そうとしたか、朝河の研究論文に対する厳しい立場がよく理解できよう。

独創的な論点を含まないものを彼は挙げなかった。たとえば「島津忠久の生い立ち」は、徹底的な史料批判を通じて島津藩の原点を説き明かした好論文だが、「高等批評 higher criticism」ではなく、「低等批評 lower criticism」に属するとして、リストから外している（本書ではⅡ部第二章に収録。また一九三〇年前後の日本の研究論文を渉獵して、マルク・ブロックの『アナル』に書いた「日本の社会経済史における宗教の役割」(仏語)も、リストに収めていない。これらの事実から理解できることは、学術論文に対する朝河の「要求水準」の高さである。

資料1 朝河貫一の主要論文 (1905~1939)

朝河貫一が1939年に自選した27論文リストと補足5点

編訳者が『比較封建制論集』に収めた論文をゴシックで強調。

[01] *The Early Institutional Life of Japan: A Study in the Reform of 645 A.D.* pp. vi, 335. Tokyo, 1903. 『大化改新』 柏書房、2006年。

[02] The two concluding chapters of the new edition of *Japan*: edited by F. Brinkley; Boston, 1904.

[03] *The Russo-Japanese Conflict: its Causes and Issues*. pp. xiv, 383 Boston, 1904.

補01 **Bushido 1905** [本書I部第2章補論]

[04] *Japan*, a history published by the Japanese government, 1893, revised and largely rewritten, with supplementary chapters written, by K. Asakawa. (In the History of Nations series, H. C. Lodge, editor-in-chief; pp. xxii, 348. Philadelphia, 1907.)

[05] Japan in Manchuria, I and II. (In the *Yale Review*, for August and November, 1908.)

[06] The Manchurian Conventions. (In the *Yale Review*, for November, 1909.)

[07] The New Regime in China. (In the *Proceedings of the American Political Science Association*, 1909.)

[08] 『日本の禍機』 pp. vii, 258, Tokyo, 1909.

[09] Japan's Relation to China. (A chapter in *China and the Far East*, ed. by G. H. Blakeslee; New York 1910.)

[10] Edited Japanese words in *Webster's New International Dictionary of the English Language*; Springfield, 1910.

[11] **Notes on Village Government in Japan after 1600**. (In the *Journal of American Oriental Society*, vol. xxx, part 3, 1910; pp. 259-300, and vol. xxxi part 2, 1911; pp. 151-216. [本書I部第7章])

[12] **Some of the Contributions of Feudal Japan to the New Japan**. (In the *Journal of Race Development*, for July 1912; also forms a chapter in *Japan and Japanese American Relations*, edited by G. H. Blakeslee; New York, 1912.) [本書I部第2章]

[13] **The Origin of the Feudal Land Tenure in Japan**. (In the *American Historical Review*, vol. xx: no. 1. pp. 1-23; Washington, 1914.) [本書I部第4章]

補02 「日本封建土地制度の起源の拙稿につきて」『史学雑誌』1915年5月号 [本書II部第1章]

[14] **The Life of a Monastic Shō in Medieval Japan**. (In the *Annual report of the American Historical Association*, for 1916, vol. 1; pp. 311-342.) [本書I部第5章]

[15] **Social Reactions of Buddhism in Medieval Japan**. (A chapter in the *Pacific Ocean in History*, edited by Henry M. Stephens and H. E. Bolton; pp. 481-496, New York, 1917.) [本書I部第9章]

[16] **Some Aspects of Japanese Feudal Institutions.**(In the *Transactions of the Asiatic Society of Japan*, vol. xlvi, part. 1, pp. 77-102; Tokyo, 1918.) [本書 I 部第 1 章] 上野菊爾訳「中世日本の寺院領」『歴史地理』東京、1920年 3 月号。

[17] **Introduction to Japanese Sculpture of the Suiko Period.** by Langdon and Lorraine Warner, Published for the Cleveland Museum of Art, by the Yale University Press, New Haven, 1923.) [本書 I 部第 9 章補論]

[18] A proposal for a synthetic language for the Occident only, printed in the "Excerpts from Annual Report" of the International Auxiliary Language Association in the U.S., 1928. A translation by A.D. into Occidental in the *Cosmoglotta*, Feb. 1929.

[19] **Agriculture in Japanese History: A General Survey.** (In the *Economic History Review*, vol. 2, no. 1, pp. 81-92. London, 1929.) [本書 I 部第 8 章]

[20] **The Early Shō and the Early Manor: A Comparative Study.** (In the *Journal of Economic and Business History*, vol. 1, no. 2, pp. 177-207. Cambridge, 1929.) [本書 I 部第 3 章]

[21] *The documents of Iriki; illustrative of the development of the feudal institutions of Japan*; pp. xvi, 584. New Haven and London, 1929. [入来文書] 2005年、柏書房。

[22] **Feudalism : Japanese.** (In the *Encyclopaedia of Social Sciences*. vol. 7. New York, 1931.) [本書 I 部第 10 章]

補03 **Feudalism : Tentative definition** [本書 I 部第 10 章補論]

[23] **The Founding of the Shogunate by Minamoto-no-Yoritomo.** (In the *Seminarium Kondakovianum*, VI; Prague, Checkslovakia, 1933.) [本書 I 部第 6 章]

[24] Definitions of Japanese words in *Webster's New International Dictionary of the English Language, second edition*, Springfield, 1934.)

補04 **La place de la religion dans l'histoire economique et sociale du Japon.** *Annales d'histoire Economique et Sociale* 1933

[25] 「ループネル氏仏国農地史論」(1、2)『社会経済史学』1935年 8 月号、9 月号 [本書 II 部第 3 章]

[26] 「プロッシ教授の仏国田園史特徴論」『社会経済史学』1935年 12 月号 [本書 II 部第 4 章]

[27] 「ヴェーレル氏の北方ゲルマン原始農業論」『社会経済史学』1937年 8 月号 [本書 II 部第 5 章]

補05 「島津忠久の生い立ち——低等批評の一例」『史苑』1939年 9 月 [本書 II 部第 2 章]

このリストに、Bibliography: K. Asakawa, A List of twenty-seven outstanding writings prepared by Dr. Asakawa in 1939 というタイトルを付したのが朝河自身なのか、それとも朝河遺品の整理担当者かは不明だが、いずれにせよこれは歴史学正教授に昇進して二年後、日米開戦の二年前のことであった。

さて、リストに掲げられた二七篇の「傑出した学術論文」のうち、比較封建社会に関わるものをゴシックで強調すると、資料1のように英文論文一篇、日本語論文三篇、計一四篇である。次いで、原リストには含まれていないが、朝河の比較封建社会論を理解するうえで役立つと思われる論文を補足した。すなわち以下の五篇である。

補01 「武士道」(講演) 一九〇五年(英文、タイプ手稿)

補02 「日本封建土地制度起源の拙稿につきて」(『史学雑誌』一九一五年五月号)

補03 「封建制」(試験覚書) 一九三三年(英文、タイプ手稿)

補04 La place de la religion dans l'histoire économique et sociale du Japon. *Annales d'histoire Economique et Sociale*, 1933.

補05 「島津忠久の生い立ち——低等批評の一例」(『史苑』一九三九年九月、立教大学史学会)

2 本書の論文配列の方針について

このようにして選んだ英文二三篇の訳文、和文五篇、計一八篇の珠玉をどのように配列するか。編訳者は熟慮の末に、まず訳文と原和文とを分けることにした。翻訳文と朝河和文とは、文体がかなり異なるので、朝河の肉声に近い和文をⅡ部とし、翻訳文をⅠ部とした。ただし、朝河を原英文で読みたい読者も少なくないと思われるので、Ⅰ部に対応する英原文のうち、これまで単行本に未収のものをⅢ部「英文の部」とした。つまりⅠ部は編訳者による英文の翻訳、Ⅱ部(旧仮名遣い等の修正は編訳者による)とⅢ部は朝河の原文である。さて各パート内の配列は、Ⅰ部とⅡ部

このリストに、Bibliography: K. Asakawa, A List of twenty-seven outstanding writings prepared by Dr. Asakawa in 1939 というタイトルを付したのが朝河自身なのか、それとも朝河遺品の整理担当者かは不明だが、いずれにせよこれは歴史学正教授に昇進して二年後、日米開戦の二年前のことであった。

さて、リストに掲げられた二七篇の「傑出した学術論文」のうち、比較封建社会に関わるものをゴシックで強調すると、資料1のように英文論文一篇、日本語論文三篇、計一四篇である。次いで、原リストには含まれていないが、朝河の比較封建社会論を理解するうえで役立つと思われる論文を補足した。すなわち以下の五篇である。

補01 「武士道」(講演) 一九〇五年(英文、タイプ手稿)

補02 「日本封建土地制度起源の拙稿につきて」(『史学雑誌』一九一五年五月号)

補03 「封建制」(試論覚書) 一九三三年(英文、タイプ手稿)

補04 La place de la religion dans l'histoire économique et sociale du Japon. *Annales d'histoire Economique et Sociale*, 1933.

補05 「島津忠久の生い立ち——低等批評の一例」(『史苑』一九三九年九月、立教大学史学会)

2 本書の論文配列の方針について

このようにして選んだ英文二三篇の訳文、和文五篇、計一八篇の珠玉をどのように配列するか。編訳者は熟慮の末に、まず訳文と原和文とを分けることにした。訳文と朝河和文とは、文体がかなり異なるので、朝河の肉声に近い和文をⅡ部とし、訳文をⅠ部とした。ただし、朝河を原英文で読みたい読者も少なくないと思われるので、Ⅰ部に対応する英原文のうち、これまで単行本に未収のものをⅢ部「英文の部」とした。つまりⅠ部は編訳者による英文の翻訳、Ⅱ部(旧仮名遣い等の修正は編訳者による)とⅢ部は朝河の原文である。さて各パート内の配列は、Ⅰ部とⅡ部

注15 『園城寺之研究』天台宗寺門派御遠忌事務局編、京都、一九三一年十一月。

注17 中川与之助「相国寺領の研究」『経済史研究』京都経済史研究会、一九三〇年三月（一月）、四号（四月）。

注18 黒正巖「明治初年の宗教的農民一揆」『史林』一五卷一号、史学研究会（隔月）（京都大文学部）、一九三〇年。

注19 伊達光美『日本宗教制度史料類聚考』東京、臨川書店、一九二九年。同『日本寺院法論』東京巖松堂書店、一九三〇年。

注20 宮地直一『諏訪神社の研究—諏訪史』信濃教育会諏訪部会、前編、一九三一年。

注21 三上左明「神明社について—考察」『歴史地理』一九三〇年四月号。

『アナール』論文といい、忠久伝説の考証といい、これらの論文は朝河の深い学識を示す。にもかかわらず、これらの「学界レビュー」あるいは「史料整理」段階だけでは「論文」としてふさわしいとみなさず、朝河は「自選リスト」に加えなかった。誇り高い朝河の学問的自負心を端的に示す例として、編訳者はあえて「忠久伝説の考証」（Ⅱ部第二章）を本書に収めたが、『アナール』論文は紙幅の制約から割愛せざるを得なかった。

3 本書所収の各論文について

I 部

第一章「日本封建制の時期区分——封建社会Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」について

原タイトルと掲載誌は次の通りである。[16] Some Aspects of Japanese Feudal Institutions, the Transactions of the

Asiatic Society of Japan, (vol. XLVI, No. 1, pp. 77-102, Tokyo, 1918. 「日本の封建制に就いて」上野菊爾訳『歴史地理』一九二〇

（大正九）年四月、第三五巻第四号二九七—三二八ページ。ただし原文脚注の訳がない。これは東京（一九一八年三月二十七日、

於慶応大学)における講演の記録である。たいへん分かりやすく日本の封建社会を三つの発展段階に分けて、その特徴を解説したもので、本書のいわば概説として冒頭に掲げた。

第二章「武士道とは何か——近代日本が封建日本に負うもの——」について

原タイトルと掲載誌は次の通りである。[1] Some of the Contributions of Feudal Japan to the New Japan, *The Journal of Race Development* (Vol. 3, No. 1, July, 1912.) これはクラーク大学シンポジウムにおける講演記録をキネ雑誌に掲載し、その後この掲載号に改めて筆を入れて定稿としたものである。テキストは Asakawa Papers of Sterling Library, Yale University の英文手稿、タイプ原稿自筆修正版による。

第二章補論「武士道について」について

原タイトルと掲載誌は次の通りである。[補01] Bushido 1905 このテキストも Asakawa Papers のタイプ原稿自筆書込み版による。朝河は日露戦争以後「四〇余個所に出講して、幾千のあらゆる階級の人士に向かいて意見を陳じ」と『日本の禍機』で書いている(講談社学術文庫版一三二―一三三ページ)。これはそのような講演のために準備された手稿の一つであり、父正澄の武士道教育に触れた個所が興味深い。

第三章「初期の庄と初期のマナーの比較研究」について

原タイトルと掲載誌は次の通りである。[02] The Early SHO and the Early Manor, *Journal of Economic and Business History*, (Vol. 1, No. 2, pp. 177-207, Cambridge, Mass., Feb. 1929.)

これは朝河の比較法制史学を代表する論文の一つである。もし朝河史学を代表する論文を一つだけ選択するとすれば、これであろう。マナーと庄の異同を論じて、余すところがない傑作である。一九二九年はライフワーク『入来文書』が出版された年であり、そのエッセンスが凝縮されている。

第四章「日本における封建的土地保有の起源」について

原タイトルと掲載誌は次の通りである。[03] The Origin of the Feudal Land Tenure in Japan, *American Historical Review*, (Vol. XX, No. 1, pp. 1-23, Washington, Oct. 1914.) この論文は庄から封土への転換過程を追求したもので、朝河史学

初期の到達点を示す。これに対して黑板勝美助教が『史学雑誌』(二六編三号)に批評を書いた。朝河は黑板の誤読を批判し「日本封建土地制度起源の拙稿につきて」で反論した(二六編六号)「本書Ⅱ部第一章」。この反論において朝河は外国には「内国において企て及び難き思想の自由あり」と強調し、「日本史の中より貴重なる宝玉を世界人類の発達史に向いて貢献するを得んか」と結んでいる。「世界人類の発達史に向いて貢献する」日本史学の樹立こそが朝河史学の追求課題であった。これはまさにその後、日本を覆った皇国史観とは対照的な、世界に向かって開かれた日本史像の原型であった。

第五章「中世日本の寺院領の生活」について

原タイトルと掲載誌は次の通りである。[17] *The Life of a Monastic SHO in Medieval Japan*, *Annual Report of American Historical Association for 1916*, (I, pp. 311-342, Washington, 1916. 「中世日本の寺院領」上野菊爾訳、『歴史地理』一九二〇年(大正九)三月、第三五卷第三号二一九―二三六ページ。ただし脚注の誤なし)これは東大寺の五つの寺領についての分析である。フランスのサンジェルマン・デ・プレとの比較研究(Ⅰ部第三章)と対になる論文である。

第六章「源頼朝による幕府の樹立」について

原タイトルと掲載誌は次の通りである。[18] *The Founding of the Shogunate by Minamoto no Yoritomo*, *Seminarium Kondakovianum: Recueil d'Etudes Archeologic, Histoire de'Art, Etudes Byzantines*, (VI, pp. 109-129, Praha, 1933.)これは鎌倉幕府の成立を分析した政治史である。

第七章「徳川幕府の村落統治についての覚書」について

原タイトルと掲載誌は次の通りである。[19] *Notes on Village Government in Japan After 1600*, *Journal of the American Oriental Society*, (I, Vol. 30, 1909-10, II, Vol. 31, 1910-11.)朝河の日本封建制研究は鎌倉・室町時代に重点が置かれていて、徳川時代の研究は少ない。これは朝河が徳川時代をいわばポスト封建制、すなわち近代的集権国家への過渡期と見ていたからであろう。日本の国史界の主流は、徳川時代を典型的な封建社会と見ているようだが、これでは封建社会史的に分析できまい。朝河史学を黙殺することによって日本史学が被った損失は、きわめて大きい。

第八章「日本史における農業」について

原タイトルと掲載誌は次の通りである。[19] *Agriculture in Japanese History: A General Survey, Economic History Review* (Vol. II, pp. 81-92, London, Jan. 1929) 朝河はこの論文においても、ヨーロッパと比較して日本農業の大きな違いが水稲耕作にあることを繰り返し指摘している。この論文は、水稲耕作こそが日本農業の「先天的要請」であることを強調したものである。

第九章「中世における仏教の社会的反作用」について

原タイトルと掲載誌は次の通りである。[15] *Social Reactions of Buddhism in Medieval Japan, The Pacific Ocean in History* (by H. Morse Stephens and Herbert E. Bolton, The Macmillan Company, 1917) 武士の精神生活を支えた鎌倉仏教の意味は、武士の経済生活、社会生活の分析によってこそ、十分に説明できる。日本の封建制の特徴をとらえきつた朝河史学は、武士の精神生活まで視野が広がり、それが近代社会まで連なることを仏教受容の面から分析している。

第九章補論「推古朝の仏教芸術」について

原タイトルと掲載誌は次の通りである。[17] *Preface to Langdon Warner & Lorraine d'O Warner, Japanese sculpture of the Suiko period* (New Haven, the Yale University Press, 1923, 寿岳文章訳、『推古彫刻』みすず書房。峰島旭雄訳、『朝河貫一書簡集』) 朝河の仏教および仏教芸術についての理解の深さをよく示す短文である。朝河は伊東忠太や関野貞などから教示を受けたと記している。

第十章「日本封建制の定義——セリグマン編『社会科学百科辞典』——」について

原タイトルと掲載誌は次の通りである。[22] *Feudalism: Japanese, Encyclopedia of the Social Sciences*, (Vol. 6, pp. 214-220, New York, 1930) その編者の名で通称されるいわゆる『セリグマン百科辞典』において、ヨーロッパ封建制を定義したのはマルク・ブロックだが、これと並んで日本封建制を定義したのは、ほかならぬ朝河であった。『入来文書』によって獲得された日本封建制の解明は、一九三〇年に世界的に認知されたことになる。以後欧米では、この成果が広く受け入れられたが、遺憾ながら朝河の祖国では、先ず皇国史観によって、戦後は唯物史観によって、徹底的に黙

殺された。これら両極によって無視・黙殺された朝河史学の蘇生は、ポスト冷戦期を待たなければならなかった。これは朝河史学の悲劇であるとともに日本国民にとっての悲劇でもあったと思われる。

第十章補論「封建社会の性質——三カ条、未定稿——」について

原タイトルと掲載誌は次の通りである。「補03」Feudalism: Tentative definition タイプ手稿。朝河は『セリグマン百科辞典』で、ひとまず定義したあとでも、探究と試行錯誤の模索を止めなかった。その断面を示す覚書である。

II部

第一章「日本封建制度起源の拙稿につきて——黒板勝美氏に答える——」について

原タイトルは以下の通りである。「補02」日本封建土地制度起源の拙稿につきて」(『史学雑誌』第二六編第六号九六一〇〇ページ、一九一五年(大正四)五月。ここで拙稿とは「04」を指す)。

第二章「島津忠久の生い立ち——低等批評の一例——」について

原タイトルも同じ。「補05」(『史苑』第二二巻、第四号四一〜一五八ページ、東京、立教大学史学会、一九三九年(昭和一四)九月)。朝河著『南九州の封建制』は未完に終わったが、「生い立ち」はその資料の一部である。朝河は嶋津藩研究のために大量のカードを残した。

第三章「ループネル氏仏国農地史論」について

原タイトルも同じ。「25」(『ループネル氏仏国農地史論』(『社会経済史学』第五巻、第五号五八八〜六二二ページ、六号七二〜七四四ページ、一九三五年八月、九月、東京、岩波書店。Gaston Rouppnel, *Histoire de la campagne française*, Paris, 1932.)。(書評) G・ループネル著『フランス農地史論一九三二』。朝河はヨーロッパのなかでも特にフランスにおける封建制の発達に着目していた。これはフランスこそがローマ帝国の遺産を継承して典型的な発達を遂げたと見たからだ。ループネルの農地史論を丁寧に紹介した、このレビュー・アーティクルは、朝河が農業発達の技術的側面にも深い関心を抱いていたことを示している。

第四章「プロッシ教授の仏国田園史特徴論」について

原タイトルも同じ。「26」『プロッシ教授の仏国田園史特徴論』（『社会経済史学』第五卷、第九号一〇九四〜一一〇三ページ、一九三五年一月、東京、岩波書店。Marc Bloch, *Les caractères originaux de l'histoire rurale française*, 『フランス農村史の基本性格』Institut for Sammenhængende Kulturforskning, B.XIX, Oslo, 1931.）（書評）マルク・プロック著『フランス農村史の基本性格一九三一』。朝河はマルク・プロックと十数年にわたる交遊関係をもっていたが、一度も会ったことはなく、「プロッシ教授」と表記している。

第五章「ヴェーレル氏の北方ゲルマン原始農業論」について

原タイトルも同じ。「27」『ヴェーレル氏の北方ゲルマン原始農業論』（『社会経済史学』第七卷、第五号六〇四〜六一七ページ、一九三七年八月、東京、岩波書店。Karl Wihner, *Beiträge zur ältesten Agrargeschichte des germanischen Nordens*, Jena, 1935.）（書評）K・ヴェーレル著『北方ゲルマン原始農業論一九三七』。朝河はフランス農業を典型的な例として観察しつつ、北方ゲルマン社会にも注意を向けていたことを示す書評である。オットー・ヒンツェは、朝河史学においてゲルマンの事例が少ないことについて、朝河はドイツ語が得手でないのかと示唆しているが、実は朝河は元来フランス語以上にドイツ語を学んでいた。ダートマス大学卒業に際しては、クラスの首席に贈られるカッパー賞を得た。つまり朝河はドイツ語が不得手であったのではなく、研究テーマとしての必然性ゆえに、フランス封建制研究に焦点を当てたことが分かる。

Ⅲ部 英文の部について

第一章から第五章まで、すべて原タイトル通りである。Ⅰ部に訳文を収めた英原文をすべて収めることが当初の計画であったが、紙幅の制約のため、すべてに *Land and Society in Medieval Japan* に収められているものを割愛したことは、凡例に示した通りである。

編訳者あとがき

本書は『入来文書』『大化改新』に次ぐ、朝河三部作の最後の一冊として、日欧の比較封建制研究に関わる朝河の代表的論文を編訳したものである。朝河が自らの学問を「比較法制史」研究と名づけたことは、割合よく知られている。この文脈では、本書の書名を『比較法制史研究』と名づける案もありうるが、少し堅苦しい。内容もいささか範囲が狭すぎる。朝河は「比較法制史」の視座から歴史の骨格を把握しようとしていたからだ。その意味で書名をあえて『朝河貫一 比較封建制論集』とした。マルク・ブロックには、有名な『封建社会』がある。本書はブロックを意識しつつ、日本封建制との対比を強調する脈絡で名づけたものである。読者のご批判を仰ぎたい。

イエール大学は朝河就任百周年を記念して二〇〇七年三月九〜十日に朝河記念のシンポジウム「日本と世界」を開く予定で、私もこれに招かれている。そこでこのシンポジウムを目標に本書の編集を早めた。イエール大学「朝河記念シンポジウム」を一つの契機として、朝河史学の再生を祈念してやまない。

ここに謝辞を記すが、本書の第一の「功労者」は、三部作全体を通じて、編訳者を支えてくれた齊藤千恵子さんである。齊藤さんとの分業・協業関係はこれまでの二冊と同じである。改めて感謝の意を表す。

第二は欧文校正を担当していただいた佐田一郎氏およびインフォメディア・ジャパン村上ひろこ氏である。

第三は高橋光夫氏である。ライブリアン高橋氏は、私が依頼しないものまで含めて、終始文献探しを手伝って下さった。

第四は柏書房のみなさんである。故渡辺周一の遺髪を継いだ富澤凡子社長、山口泰生、小代渉両氏、校正者原木加都子氏ほか関係者諸氏である。

第五は朝河研究会のメンバー、すなわち饗庭孝典、浅野豊美、故阿部善雄、五十嵐卓、井出孫六、入来院貞子、

故金井圓、塩崎智、茂田宏、清水美和、角田修、故中田勉、中村きよ枝、中村尚美、故根本久雄、野口英二郎、原輝史、福留久大、増井由紀美、松村正義、間宮国夫、峰島旭雄、山内晴子、山岡道男、米田富太郎、渡部恒雄の諸氏である。

第六は経済学集団の仲間たちである。

最後だが、朝河三部作の本当の生みの親は、前二作同様に朝河貫一顕彰協会の関係者諸氏である。関係者のご芳名を五十音順に列挙させていただき、お礼に代える次第である（敬称略）。

明石康（元国連事務次長）、吾妻哲夫（前福島桑野会会長）、阿部静雄（会津地区顕彰協会）、伊佐早幸男（福島民友新聞社社長）、石川博之（前安積桑野会会長）、市川公男（安達福祉会常務理事、前二本松市文化課長）、伊藤司（元福島県立医科大学長）、猪熊豊人（白河県南地区顕彰協会）、今泉亀撤（角膜移植先駆者）、今泉正顕（前安積歴史博物館館長）、梅田秀男（元安積高校校長）、遠藤久夫（前郡山市教育長）、故遠藤正二（元福島県議会議長）、圓佛誠孝（タートマス朝河賞受賞者）、大内鷹（元二本松市市長）、大高善兵衛（郡山商工会議所会頭）、小沢征爾（タートマス朝河賞受賞者）、柿沼良訓（須賀川桑野会会長）、嘉治元郎（元国際文化会館理事）、片寄隆臣（前川俣町教育長）、金子英生（元イエール大学東アジア図書館長）、川島廣守（東京福島県人会会長）、神田紀（川俣町教育長）、菅野俊之（福島県立図書館総括司書部長）、北原健児（福島中央テレビ社長）、国分敏雄（顕彰協会事務局）、後藤宏迪（安達地方広域行政組合事務局長）、小山宙丸（元早稲田大学総長）、佐久間崇之（安積桑野会会長）、佐々木道昇（二本松稲門会幹事長）、佐藤栄一（稲門会福島県支部長）、佐藤栄佐久（前福島県知事）、佐藤慶一（テレビユー福島社長）、佐藤則男（福島映像企画社長）、佐藤利栄（顕彰協会事務局）、佐藤仁一（本宮桑野会会長）、佐藤晃暢（福島市教育長）、佐藤司（元アジア大学教授）、佐藤捷善（福島川俣地区顕彰協会）、佐藤祀男（前福島映像企画社長）、白井克彦（早稲田大学総長）、新澤昌英（安積桑野会副会長）、須佐喜夫（郡山稲門会会長）、鈴木直（関西地区顕彰協会、関博之（安積高校校長）、関根清馬（郡山地区顕彰協会）、瀬戸孝則（福島市長）、高城俊春（福島県文化センター館長）、高城勤治（前福島早稲田会会長）、高田宗彦（前本宮桑野会会長）、武田徹（福島国際交流の会会長）、田村秀夫（安積高校教頭）、坪井栄孝（元日本医師会会長）、水流信雄（薩摩川内市役所）、ドナルド・キーン（コロンビア大学名誉教授）、富田孝志（福

島県教育長)、故永井道雄(元国際文化会館理事長)、中路信(東京桑野会)、中村啓治(福島テレビ社長)、仲村哲郎(安積博物館館長)、西原春夫(元早稲田大学総長)、糠沢和夫(元経団連専務理事)、糠沢修一(福島テレビ副社長)、根本匠(衆議院議員)、根本豊徳(二本松市文化課長)、花角慎一(ラジオ福島社長)、花田易(福島民報社会長)、浜田宏一(イエール大学教授)、原正夫(郡山市長)、広瀬渉(前安積高校校長)、福元忠一(元入来町長)、藤原孝雄(福島川俣地区顕彰協会)、藤森英二(前郡山市長)、冬室保秋(顕彰協会事務局)、古川清(朝河顕彰協会会長・東京桑野会会長)、古川道郎(川俣町長)、星武典(東京桑野会)、堀内敏男(いわき地区顕彰協会)、本田哲夫(郡山稲門会幹事長)、本田光弥(安積高校教頭)、松浦健二(川口高校校長)、故松本重治(元国際文化会館理事長)、松本洋(国際文化会館専務理事)、水口慎(東京桑野会副会長)、水田莞爾(二本松市助役)、三浦尚之(福島学院大学教授)、三保恵一(二本松市長)、柳沼八郎(朝河顕彰協会顧問)、山口勇(元福島県議会議員)、山口隼正(元東京大学史料編纂所教授)、湯浅譲二(作曲家)、吉田幹則(福島放送社長)、依藤道夫(都留文化大学教授)、渡部世一(福島民報社社長)、渡辺専一(二本松市教育長)、渡辺剛(東日本学院代表)、

以上の諸氏である。

二〇〇七年新春

編訳者記す。

[著者紹介]

朝河貫一(あさかわ・かんいち)

1873年12月20日 旧二本松藩(現二本松市)生まれ。父は戊辰戦争生き残りの正澄。

1892年福島県尋常中学校(現安積高校)を卒業。

1895年東京専門学校(現早稲田大学)を卒業し、同年12月米国留学(22歳)。

1899年ダートマス大学を卒業し、イエール大学大学院に進む。

1902年『大化の改新』でイエール大学博士号(29歳)。

1903-06年ダートマス大講師。

1904年*The Russo-Japanese Conflict* 出版。

1905年8月ポーツマス会議に際して、市民オブザーバーとしてホテル・ウェントワースに滞在し、賠償放棄論を説く。

1906年2月から約1年半一時帰国し、イエール大学図書館および米国議会図書館のために図書収集。

1907年イエール大学講師に就任(33歳)(2007年は百周年)。

1909年『日本の禍機』(朝河が日本語で書いた唯一の本)。

1915年大隈首相に「覇権なきアジア外交」を進言。

1917年6月~19年9月、二度目の一時帰国。東大史料編纂所等で史料調査。この過程で入来文書を発見し、10年後に*The Documents of Iriki*を出版(55歳)。

1930年歴史学準教授。

1934年セイブルック・カレッジ・フェロウ(60歳)。

1937年歴史学教授に昇進(63歳)。

1941年11月、ラングドン・ウォーナーの示唆で昭和天皇へのルーズベルト親書案を書く。

1942年定年、名誉教授。

1948年8月11日心臓麻痺で死去、享年74歳。

著書

The Early Institutional Life of Japan, 1903. (邦訳柏書房、2006年)

The Russo-Japanese Conflict, 1904.

『日本之禍機』実業之日本社、1909。(講談社学術文庫版、1987年)

The Documents of Iriki, 1929. (邦訳柏書房、2005年)

(遺稿集) *Land and Society in Medieval Japan*, 1965.

『朝河貫一書簡集』早稲田大学出版部、1990.

『朝河貫一 比較封建制論集』編訳、柏書房、2007年(本書)

The Selected Works of K. Asakawa on Comparative Feudal Systems

By K. Asakawa, Ph.D.

Copyright 2007 Kashiwashobo, Tokyo

【編訳者紹介】

矢吹 晋 (やぶき・すすむ)

1938年福島県郡山市生まれ。1962年東京大学経済学部卒業。東洋経済新報社、アジア経済研究所を経て、横浜市立大学教授を務め、2004年定年、同大学名誉教授。東洋文庫研究員。専攻分野は中国経済論、現代中国論、朝河学。

主な著書

『文化大革命』（講談社現代新書、1989年）、『毛沢東と周恩来』（講談社現代新書、1991年）、『鄧小平』（講談社現代新書、1993年。学術文庫版2003年）、*China's New Political Economy*, Westview Press, 1995. 『巨大国家・中国のゆくえ』（東方書店、1996年）、*China's New Political Economy*, Revised Edition, Westview Press, 1999. 『朱鎔基・中国市場経済のゆくえ』（小学館文庫、2000年）、『中国の権力システム』（平凡社新書、2000年）、（編訳）『ポーツマスから消された男』（東信堂、2002年）、『日中の風穴』（勉誠出版、2004年）、（訳）『入来文書 *The Documents of Iriki*』（柏書房、2005年）、『大化改新 *The Early Institutional Life of Japan*』（柏書房、2006年）

あさかわかんいち ひかくほうけんせいろんしゅう

朝河貫一 比較封建制論集

2007年2月25日 第1刷発行

著者……………朝河貫一

編訳者……………矢吹 晋

発行者……………富澤凡子

発行所……………柏書房株式会社

東京都文京区本駒込1-13-14 (〒113-0021)

TEL: 03-3947-8251 [営業] / 03-3947-8254 [編集]

装丁……………森 裕昌

印刷所……………大盛印刷株式会社

製本所……………株式会社ブックアート

©Susumu Yabuki, 2007 Printed in Japan

ISBN 978-4-7601-3038-2